

1993 年・・・『意識と知識』
1994 年・・・『意識と知識Ⅱ』
1995 年・・・『知識は力』
1996 年・・・『何を信じていいかわからない』
1997 年・・・『懐疑心』
1998 年・・・『科学・哲学と健康管理』
1999 年・・・『科学と健康管理』
2000 年・・・『科学とは』
2001 年・・・『21世紀』
2002 年・・・『学習とコレステロール』
2003 年・・・『哲学のなぐさめ』
2004 年・・・『遺伝子の時代』
2005 年・・・『科学書と哲学書』

1986年から情報発信を隔月で始め、1990年からは毎月となり
新年の挨拶を入れるようになったのは1993年からです。

上記のタイトルは1993年から昨年までの新年のタイトルです。

恩師・三石巖先生の教え『100 年たっても腐らない情報は科学的なもの』を忘れず
発信する情報は『科学的』なものであるべきと心がけています。

.....

科学をする人は、「なぜ」「どうして」と考えている。
・・・人間は「なぜ」と思ってもすぐに忘れちゃう。
あるいは、適当な説明を聞いて納得しちゃう。
これじゃだめで、自分の頭にズーっと持っておくのが大事だと思います。

常識は大事なんだけど、邪魔するものなんです。
不思議だなと思ったことは、ちゃんとした答が出るまでその質問を
ずっと忘れないで下さい。その答が出ると、ものすごく嬉しい。

科学の一番の良いところは、いったんその味を覚えたら忘れないということです。
答が分かった時の面白さ、それが発見であるわけです。

科学は自分が納得するかしらないかであって、誰だってできる。
発見は、回りの人が大事に思うかどうかではなく、自分にとって大事なら嬉しいんです

・・・養老孟司氏の講演から

サイエンスとはもともと何かと言えば、ラテン語のscientiaで知識そのものを意味している
scientiaは、scio（知る）の名詞形であり、
サイエンスとは、本来、知ること全体、知識の総体を指しているのである。

・・・科学というものは、本来おもしろいものである。
わかれば、こんな面白いものはない。何がどうなっているかを知りたいというのは、
人間が生まれながらに持っている、どうしようもない本性であって、
その本性につき動かされてできあがったのが、科学という知の全体像なのだから、
これが面白くなかろうはずはないのである。

もちろんわからなければ面白くないし、わからないものをわからなくてもよいからとにかく覚えろというようなプレッシャーをかけられたら（一貫してそれをやってきたのが日本の科学教育ならぬ理科教育だった）、面白かろうはずがない。

私は、ヴィットゲンシュタインの「語りうるものはすべて明晰に語りうる」という言葉の信奉者で自分の特性は、難しいことを分かりやすく語ることにありと思って、この仕事を続けてきた。

・・・ 立花隆氏の著書から

.....

三石先生や養老氏、立花氏と同じ科学的な思考回路に基づいた立場から今年も科学的な健康管理・回復の情報をお伝えしたいと考えています。